



令和 7 年度病害虫発生予報第 6 号

令和 7 年 8 月 6 日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要

区分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量
普通作物	イネ	いもち病（穂いもち）	平 年 並	少 な い
		紋枯病	—	やや少ない
		セジロウンカ	—	平 年 並
		トビイロウンカ	—	平 年 並
		斑点米カメムシ類	—	多 い
		コブノメイガ	—	少 な い
		フタオビコヤガ	—	少 な い
	ダイズ	紫斑病	平 年 並	平 年 並
		ハスモンヨトウ	早 い	多 い
		カメムシ類	やや早い	やや多い
果樹	ナシ	黒斑病	—	平 年 並
		ハダニ類	—	多 い
		シンクイムシ類	平 年 並	やや多い
	カキ	うどんこ病	やや遅い	やや少ない
		炭疽病	やや遅い	やや少ない
		カキノヘタムシガ	平 年 並	平 年 並
果樹共通	カメムシ類	—	平 年 並	
野菜	ネギ	軟腐病	平 年 並	多 い
		白絹病	平 年 並	やや多い
		黒斑病	—	平 年 並
		ネギハモグリバエ	—	平 年 並
		ネギアザミウマ	—	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並
	ナガイモ	炭疽病	平 年 並	平 年 並
		ナガイモコガ	平 年 並	平 年 並
		ハダニ類	平 年 並	やや多い
		シロイチモジヨトウ	平 年 並	平 年 並
	キャベツ・ブロッコリー	ハスモンヨトウ	平 年 並	やや多い



気象予報（抜粋）

1 か月予報（8 月 2 日～9 月 1 日：7 月 3 1 日、広島地方気象台発表）

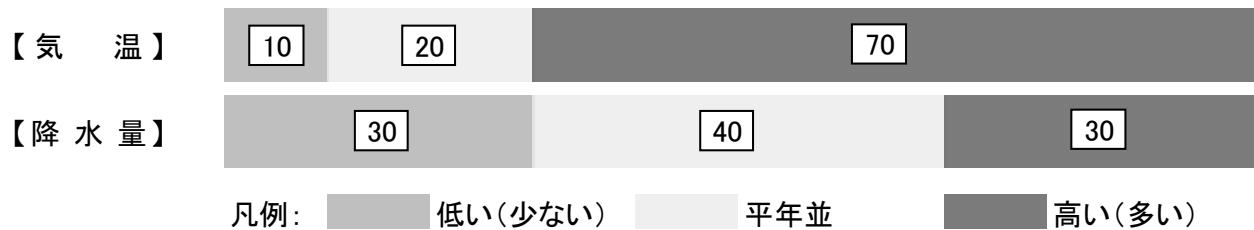
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

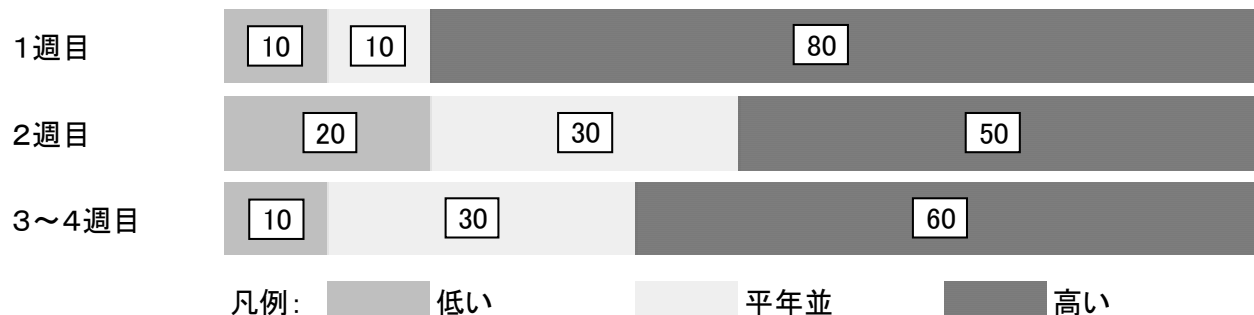
向こう 1 か月の平均気温は、高い確率 7 0 % です。

週別の気温は、1 週目は、高い確率 8 0 % です。2 週目は、高い確率 5 0 % です。3～4 週目は、高い確率 6 0 % です。

＜向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)＞



＜気温経過の各階級の確率(%)＞



普通作物

〔イ ネ〕

1 いもち病（穂いもち）

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平 年 並
発 生 量	少 な い

（2）予報の根拠

ア 7 月下旬の葉いもち発生ほ場率は 2. 7 %（平年：8. 3 %）と、平年より低い。

イ 7 月下旬現在、水稻の出穂期は、平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、本病の発生は少ないと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 穂いもち防除は予防防除を基本とする。なお、中間地～山間地等の葉いもちの発生が多い地域では、穂いもちの発生が懸念されるため、防除を徹底する。



- イ 粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に散布する。なお、降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある。
- ウ まだ出穂していない中生品種などにおいて、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布する（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とする。また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。
- エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」などのいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植えなどの条件では特に発生しやすい。
- オ 鳥取県では、平成26年にストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の広域発生が一部の地域で認められ、平成27年以降、本系統薬剤の使用を中止していた。しかし、その後のモニタリング調査から、現地ほ場において耐性菌が生存している可能性は低いと考えられたため、令和5年から県内全域の一般ほ場において、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の使用を可能としている。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。
- カ 葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもち防除を行う。

2 紋枯病

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	やや少ない

（2）予報の根拠

- ア 8月1日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生はやや少ない。
- イ 防除効果の高い育苗箱施用剤が普及している。
- ウ 以上のこと及び向こう1か月の気象予報から、本病の発生はやや少ないと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病害虫防除指針などを参考にして追加防除を行う。

3 セジロウンカ

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	平年並

（2）予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。
- イ 8月1日現在、現地ほ場における発生は平年並である。
- ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

要防除水準（成幼虫数10頭／株）を超えているほ場では、病害虫防除指針などを参考にして、粉剤、水和剤などで直ちに防除を行う。



4 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 8月1日現在、現地ほ場での発生は認められていない。

ウ 海外飛来性害虫飛来予測システムの解析結果から、6月中旬～下旬にかけて複数回の飛来があったと推測される。

エ これまでの発生状況、飛来予測システムの解析結果及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、本種の発生は地域間差及びほ場間差が大きいため、ほ場における生息密度に注意し、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。

イ 8月中旬頃のを要防除水準は、成幼虫数1頭／株である。要防除水準を超えた場合は、病害虫防除指針などを参考にして、粉剤、水和剤などで防除を行う。

5 斑点米カメムシ類（令和7年7月11日付けで病害虫発生予察注意報第1号、令和7年7月22日付けで病害虫発生予察注意報第2号を発表）

(1) 予報の内容

発生地域 県内全域

発生量 多い

(2) 予報の根拠

ア 6月～7月下旬までの予察灯へのアカスジカスミカメの総誘殺数はやや多い。

イ 8月1日現在、早植え、極早生品種など、既に穂揃い期を迎えた水田における斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシ、イネカメムシなど）の発生量は平年より多い。

ウ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年より多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

【アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなどのカメムシ類】

ア 水田周辺の雑草地、畦畔などのイネ科雑草はカメムシ類の増殖源となるので、適正な管理を行う。

・ 早生品種など、7月下旬～8月上旬に出穂するほ場

出穂20～14日前頃に畦畔などの草刈りを行っていないほ場では、穂揃い期から乳熟期に草刈りを行い、その直後に、水田に追い込まれたカメムシ類を粉剤、水和剤などで防除する方法がある。

・ 遅植えほ場、中生品種など、8月中旬に出穂するほ場

イネの出穂20～14日前頃及び出穂期にイネ科雑草の草刈りを行って、カメムシ類の発生源を少なくする。ただし、イネの出穂期以降に、穂を付けたイネ科雑草の草刈りを行うと、雑草地で増殖したカメムシ類を水田に追い込むので、イネ科雑草が穂を付ける前に草刈りを行う。

イ 水田内で穂をつけたヒエ類はカメムシ類の発生を助長するので、見つけ次第抜き取る。



ウ 粉剤、水和剤などを使用する場合は、穂揃い期から乳熟初期に防除を行う。その後も発生が多い場合は7～10日間隔で1～2回の追加防除を行う。

エ アカスジカスミカメが優占する水田では、粒剤による防除も可能である。病害虫防除指針などを参考にして、各薬剤の散布適期に湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項などを確認するとともに、止水期間を1週間程度とする。また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。なお、散布後も発生が多い場合は粉剤、水和剤などで追加防除を行う。

オ 水田周辺に出穂したイネ科雑草が多いほ場では、カメムシ類が多発する可能性が高いので、特に注意が必要である。

【イネカメムシ】

ア イネカメムシは、他の斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、トゲシラホシカメムシなど）とは異なり、イネ科雑草地に生息する個体は少ないため、雑草管理では密度を低減できない。

イ 昨年、イネカメムシによる被害が多かった地域を中心に、既に出穂を迎えている水田では本種の多飛来も認められているので、ほ場での発生状況には十分注意する。

ウ イネカメムシの発生量が多いほ場では、出穂期～出穂直後（不稔対策）、穂揃い期～乳熟初期（1回目の7～10日後、斑点米対策）の2回防除を基本とする。

6 コブノメイガ

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	少ない

（2）予報の根拠

ア 8月1日現在、現地ほ場における発生は平年より少ない。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、発生が多いほ場では、幼虫発生初期（8月第2～3半旬頃）に病害虫防除指針などを参考にして粉剤などを散布する。なお、粒剤で防除する場合は、発蛾最盛期（8月上旬頃）に散布を行う。

7 フタオビコヤガ

（1）予報の内容

発生地域	県内全域
発生量	少ない

（2）予報の根拠

ア 8月1日現在、現地ほ場における発生は平年より少ない。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 早生品種栽培ほ場で発生が多い場合は、穂ばらみ期～穂揃い期に防除を行う。なお、この時期は他の病害虫の防除時期と重なるので、本種にも登録のある殺虫殺菌剤などによって同時防除を行う。



イ 中生品種等、8月中旬以降に出穂するほ場では、本種の発生状況に注意し、要防除水準（暫定版：次の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生の主体が1. 2 cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）を超えた場合は、直ちに防除を行う。

[ダイズ]

1 紫斑病

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	平 年 並
発 生 量	平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針などを参考にして、水和剤又は粉剤を使用して防除を行う。

2 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	早 い
発 生 量	多 い

(2) 予報の根拠

ア 6～7月下旬までのフェロモントラップによる総誘殺数は平年より多い。

イ 若齢幼虫による被害（白変葉）は平年より早い7月下旬頃から発生しており、8月上旬以降に本種の食害が増加し始めると予想される。

ウ これまでの発生状況、現在のダイズの生育状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。

イ 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）あるいは粉剤又は水和剤などのスポット散布が有効である。

ウ 老齢幼虫に対する薬剤の効果は不安定であるため、早期発見と早期防除に努める。

3 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域	県内全域
発生時期	やや早い
発 生 量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数は平年並である。

イ 大豆の開花期はやや早いと予想されることから、本種の発生時期はやや早いと予想される。



ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針などを参考にして、開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

果 樹

〔ナ シ〕

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発 生 量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬に行った県内巡回調査の結果、果実における発生量は平年に比べてやや少なく、新梢葉においては平年並であった。

イ 7月下旬現在、県予察は場（園芸試験場、慣行防除体系）における新梢葉の発病葉率は平年に比べて高い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 発病した果実は、園外で土中に埋めるなどして速やかに処分する。

ウ 薬剤は、アリエッティC水和剤800倍液、アミスター10フロアブル1,500倍液、ストロビードライフロアブル3,000倍液などを散布する。

2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

(1) 予報の内容

発 生 量 多 い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬に行った県内巡回調査の結果、ハダニ類の発生量は平年に比べて多かった。

イ 7月下旬現在、県予察は場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は、0.7頭（平年：0.3頭）と平年に比べて多い。

ウ 向こう1か月の気象予報から、ハダニ類の発生に好適な条件になると見込まれ、発生量が多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ 発生密度が高い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

ウ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

エ 薬剤は、ダニゲッターフロアブル2,000倍液、スターマイトフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,500倍、マイトコーネフロアブル1,500倍液などを使用する。



3 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県内9地点のフェロモントラップ調査におけるシンクイムシ類の発生量は平年に比べてやや多くなっている。

イ モモシンクイガの越冬世代成虫の発生量は、平年に比べてやや多かった。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第4回成虫は、平年並の8月上中旬頃、モモシンクイガの第2回成虫は、平年並の8月上旬頃から増加し、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 発生が多い園ではシペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤2，000倍液又はイカズチWDG1，500倍液）、テルスターフロアブル3，000倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。

[カ キ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源量も平年並と予想される。

イ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量はやや少ないと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、スコア顆粒水和剤3，000倍液、ストロビードライフフロアブル3，000倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い

発 生 量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源量も平年並と予想される。

イ 中国地方の梅雨入り（速報値）は、6月9日頃（平年：6月6日頃）と平年に比べて3日遅く、梅雨明け（速報値）は、6月27日頃（平年：7月19日頃）と平年に比べて22日早い。

ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量はやや少ないと予想される。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、オーソサイド水和剤 80 の 1， 000 倍液、ストライド顆粒水和剤 3， 000 倍液、スコア顆粒水和剤 3， 000 倍液、ストロビードライフフロアブル 3， 000 倍液などを散布する。
- イ 緑枝の硬化が進んでおり、枝への感染は春に比べて起こりにくくなっている。今後は、二次伸びの緑枝部位と果実への感染が中心となるため、ほ場の観察をしっかりと行う。
- ウ 既に形成された新梢の病斑は、主枝や亜主枝から発生した新梢で見つけやすいので、その部位を重点的に観察する。
- エ 発病が認められた新梢や果実は必ず切除して、埋めるか園外に持ち出す。

3 カキノヘタムシガ

(1) 予報の内容

発生時期	平 年 並
発 生 量	平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）の予察灯において本種の誘殺は確認されていない。
- イ これまでの気象経過から、第2回成虫の発生盛期は平年並の7月下旬頃で、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- 薬剤は、オリオン水和剤 40 の 1， 000 倍液、アグロスリン水和剤 2， 000 倍液などを散布する。

〔果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）〕

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発 生 量	平 年 並
-------	-------

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯及び集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は、平年並～やや少ない。
- イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害は確認されていない。
- ウ 7月29～31日に行った県内巡回調査の結果、カメムシ類の果実被害は確認されなかった。
- エ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動に好適な条件であり、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月以降、第2世代成虫の発生時期となるため、果樹園への飛来が増加する恐れがある。
- イ 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。
- ウ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。
- エ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。
- オ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。



野 菜

[ネ ギ]

1 軟腐病（令和 7 年 7 月 2 9 日付けで令和 7 年度病害虫発生予察注意報第 3 号を発表）

（1）予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 多 い

（2）予報の根拠

ア 7 月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量が多い。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量が多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

令和 7 年度病害虫発生予察注意報第 3 号を参照。

2 白絹病

（1）予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 やや多い

（2）予報の根拠

ア 7 月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生は認められていない。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

（3）防除上注意すべき事項

発病がみられる場合は、モンカットフロアブル 40 の 2，000 倍液、カナメフロアブル 4，000 倍液、ジオゼット水和剤 500 倍液などを株元散布する。

3 黒斑病

（1）予報の内容

発 生 量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 7 月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は気温が 25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

（3）防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール 1000 の 1，000 倍液を予防散布する。発病後は、ロブラル水和剤 1，000～1，500 倍液、シグナムWDG 1，500 倍液、カーニバル水和剤 1，000 倍液などを散布する。

4 ネギハモグリバエ

（1）予報の内容

発 生 量 平 年 並

（2）予報の根拠

ア 7 月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう 1 か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 土寄せ時にはダントツ粒剤 6 kg / 10 a の株元散布、ベストガード粒剤 6 kg / 10 a の株元処理を行う。
- イ 散布剤はアグロスリン乳剤 2,000 倍液、ディアナ SC 2,500 ~ 5,000 倍液、ファインセーブフロアブル 2,000 倍液、グレーシア乳剤 2,000 ~ 3,000 倍液、ヨーバルフロアブル 2,500 ~ 5,000 倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400 倍液 0.4 L / m² の株元灌注も有効である。

5 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7 月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。
- イ 向こう 1 か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 土寄せ時にはダントツ粒剤 3 ~ 6 kg / 10 a の株元散布、ベストガード粒剤 6 kg / 10 a の株元処理を行う。
- イ 散布剤はハチハチ乳剤 1,000 倍液、ディアナ SC 2,500 ~ 5,000 倍液、ファインセーブフロアブル 1,000 ~ 2,000 倍液、グレーシア乳剤 2,000 ~ 3,000 倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400 倍液 0.4 L / m² の株元灌注も有効である。
- ウ 同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

6 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

- ア 7 月下旬現在、現地ほ場（米子市）及び県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。
- イ 現地調査ほ場における、発生量は平年並である。
- ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 現在幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。
- イ 防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、プレオフロアブル 1,000 倍液、マッチ乳剤 2,000 倍液、ディアナ SC 2,500 ~ 5,000 倍液、グレーシア乳剤 2,000 ~ 3,000 倍液、ヨーバルフロアブル 2,500 ~ 5,000 倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並



(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における調査地点では、発生量は平年並である。
- イ 本病は降雨によって発病が増加する。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。
- イ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。
- ウ 防除薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを予防散布する。

2 ナガイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。
- イ 県予察ほ場（園芸試験場）における幼虫の発生量は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アタブロン乳剤2,000倍液、フェニックス顆粒水和剤2,000～4,000倍液、プレバソンフロアブル5の2,000倍液などを7～10日間隔で散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるハダニ類の発生は確認されていない。
- イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 高温乾燥条件で発生量が増加する。茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。
- イ 防除薬剤は、カンザワハダニ対象に、コテツフロアブル2,000倍液、ハダニ類対象にコロマイト乳剤1,000倍液などを使用する。

4 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並



(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は
平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、
デルフィン顆粒水和剤1，000倍液などを使用する。

〔キャベツ、ブロッコリー〕

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発 生 量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場（大山町）におけるフェロモントラップによる誘殺
数はやや少なく、県予察ほ場（園芸試験場）ではやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想され
る。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。また、幼虫の中齢期以降は薬剤の効果が低
下するので、若齢期の防除を徹底する。

イ キャベツの防除薬剤は、トルネードエースDF2，000倍液、プレオフロアブ
ル1，000倍液、ファルコンフロアブル2，000～4，000倍液、グレース
シア乳剤2，000～3，000倍液などを散布する。

ウ ブロッコリーの防除薬剤は、プレオフロアブル1，000倍液、ファルコンフロ
アブル4，000倍液、ディアナSC2，500～5，000倍液、グレース
シア乳剤2，000～3，000倍液などを散布する。



〔おしらせ〕

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、独立行政法人 農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索できます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導などに際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

＜鳥取県病害虫防除所ホームページ＞

アドレス <https://www.pref.tottori.lg.jp/boujosyo/>



病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類など）などの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用ください。

＜お問い合わせ＞

普通作物関係

〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病害虫防除所

（電話：0857-53-1345、電子メール：byogaichu@pref.tottori.lg.jp）

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

（電話：0857-53-0721、ファクシミリ：0857-53-0723）

果樹・野菜関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

（電話：0858-37-4211、ファクシミリ：0858-37-4822）

※次回、予報第7号の発表は8月27日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。
各種情報は右の QR コードからご覧いただけます。



「農作業事故は自分ごと～「安全装置」と「安全確認」で“もしも”に
備えましょう」
「農作業中の熱中症に注意しましょう」
「野焼きの延焼による山林火災に注意しましょう」
「盗難を防ぐため農機具の保管管理をしっかりと行いましょう」

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課ホームページ
農業機械・農作業安全

<https://www.pref.tottori.lg.jp/119790.htm>



＜連絡先＞

〒680-8570 鳥取市東町 1-220

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課農業普及推進室
（電話：0857-26-7327、ファクシミリ：0857-26-7294）